

希望研修の学びを学校づくりに活用する支援のあり方

教科教育部 専門主事 牛山 真弓 志摩 宏道 関 健一郎
藤田 洋子 小口 博子

研究協力校 伊那市立東春近小学校 松本市立旭町小学校

【要旨】

希望研修で得た成果を、受講者が帰校後、同僚に広めることで研修の成果が広がっていくことが期待されるが、実際は校内で広がるような実践に至っていない現状がある。そこで、研修で学んだことが学校で実践され、成果が生み出される（この状態を「研修転移」と呼ぶ¹⁾）が起きるための支援のあり方を、小学校のニーズが高い外国語を切り口に探った。

その結果「研修転移」が起きるには、①管理職の理解と後押し、②職場で使える研修内容、③学んだ内容を実践する機会、④子どもの実態等に合わせた研修内容のアレンジ、の4つが大切な要因であるということが分かった。

1 テーマ設定の理由

長野県総合教育センター（以下、センター）では「研修講座を受講しても、それが個人の研修にとどまってしまい、校内に広まらない」という課題を長年抱えている。そこで、昨年度、専門主事への学校訪問要請が多い小学校外国語活動・外国語を切り口に「希望研修を学校づくりに活用するOUTPUTのあり方」についての調査研究をスタートした。昨年度の研究からは、希望研修の受講者が帰校後校内に研修内容を広めるためには、以下の3つのポイントがあることが示唆された。

・体験を重視する ・ミドルリーダーのマネジメント ・チーム学校の文化の醸成

この調査研究は「研修転移」の研究と呼ばれ、中原ほか（2018）の「研修転移の理論と実践」の中で先行研究が紹介されている²⁾。それによると「研修転移」が起きるには「管理職の理解と後押し」「職場で使える研修内容」「学んだ内容を実践する機会がある」という3つの職場要因が必要であるということが示されている。

これらの考えをもとに、今年度は、受講者が帰校後に研修で学んだことを校内に広めるための効果的な教職員研修会サポート³⁾のあり方について探った。

¹ 研修で学んだことが現場で実践される、成果が生み出されること（中原ほか 2018）

² 中原淳・島村公俊・鈴木英智佳・関根雅泰（2018）『研修転移の理論と実践』ダイヤモンド社

³ センター研修講座を受講された先生が、帰校後、講師となって行う校内研修会の支援をセンター専門主事が行う事業

2 研究

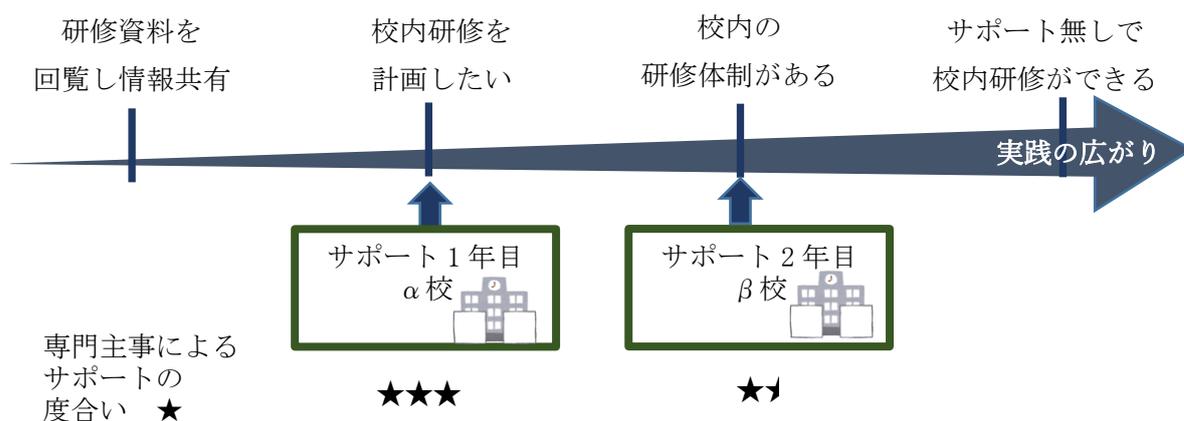
(1) 研究方法

センター希望研修を受講し、学んだことを校内に広めたいと願っている先生を対象とし、帰校後、その先生が校内研修会や授業実践を行えるよう、専門主事がニーズに応じた支援を行う。

支援の実際とその後の校内の様子を追跡して「研修転移」が起きる要因を抽出し、さらなる変容を促す要因を探る。

(2) 専門主事による協力校への支援

①外国語教育における協力校の校内研修の様子



②協力校への支援内容

	A) 支援のタイプ B) 校内で中心となる先生 C) 主なサポート対象	D) 協力校の様子 E) 願い	専門主事によるサポートの概要
α校	A) 体験を重視した研修会を共につくる B) 外国語主任 研修講座受講者 C) 全職員	D) 今年度、外国語研究部会を立ち上げた。昨年度までは、外国語の授業は ALT に任せられた授業が多く見られた。今年度の担任が進めていく外国語の授業に、多くの職員は戸惑いを感じている様子。 E) 担任も児童も楽しく外国語の授業に取り組めるようにしたい。	<ul style="list-style-type: none"> センター研修講座に参加した当該校の教諭と校内研修会を計画し実施。校内研修会では、センター研修講座受講者ととともに模擬授業やアクティビティの紹介を行った。 センター研修講座を受講した2名の教諭が授業を公開。授業後のフィードバックを全職員に伝えた。
β校	A) 職員がつくる研修会をサポート B) 外国語主任 研修講座受講者 C) 全職員	D) 外国語研究部会2年目。ALT との連携や児童に分かりやすい教材の研究を行ってきた。学校全体での研究体制は既にある。 E) 児童がより多くの英語に接し、使う機会となるような授業づくりの具体を知りたい。	<ul style="list-style-type: none"> センター研修講座に参加した当該校の教諭による校内研修を補助。 校内研修会実施後、外国語主任、当該教諭に次の授業公開に向けての授業づくりの視点を示した。

(3) 研究協力校における実践

①今年度研究部会を発足したα校～体験を重視した研修会を共につくる～

ア) 現状

α小学校では、昨年度まで ALT 主導の授業が多く見られ、学級担任が進めていく外国語の授業に戸惑いを感じている職員も多かったという。そこで今年度、外国語研究部会を立ち上げ、情報交換をしながら授業改善に取り組んでいる。そのような中、外国語主任のF教諭は、昨年度のセンター研究協議会（詳しくは平成 30 年度チーム課題研究）で、専門主事による教職員研修会サポートについて知り、自校でも専門主事のサポートによる校内研修を行いたいと考え、学校長、教頭に相談し協力を得た。

管理職の理解と後押し



校内研修の提案

イ) センター研修講座と校内研修の企画

F 教諭と外国語部会のG教諭は、それぞれ、6月、7月に行われた3・4年生の外国語活動、5・6年生の外国語のセンター研修講座を受講した。研修講座では、体験を重視した研修を受ける中で、「何を」校内で伝達をするのか明確にするとともに、他校の校内研修の実践に触れて「どのように」伝達するかの見通しをつかった。

職場で使える内容



体験重視の研修

F 教諭、G 教諭は帰校後、それぞれの研修講座で学んだ内容を外国語研究部会のメンバーと共有し、専門主事を招いての校内研修で全職員と共有したい内容を決めだし、専門主事に2回の校内研修サポートの依頼をした。

協力者をつくる



外国語部会で情報共有

ウ) 校内研修1回目

➤内容 「児童も担任も楽しめる外国語の授業になるように」という願いがあるα校の校内研修の1回目は、センター研修講座に参加をしたF教諭と専門主事による模擬授業と体験型の演習を行った。専門主事の作成したスライドを使って、始めは専門主事がリードをしながら研修を進め、少しずつ主導権をF教諭に移していった。

学んだことを実践する機会



校内研修会

➤成果 校内研修会後、「外国語について職員が共通理解をし、目指す子どもの姿が明確になった」「(研修会后)職員間で(授業を)やってみた反応などを話し合ったり、理解が広がったり深まったりした」という感想を得た。

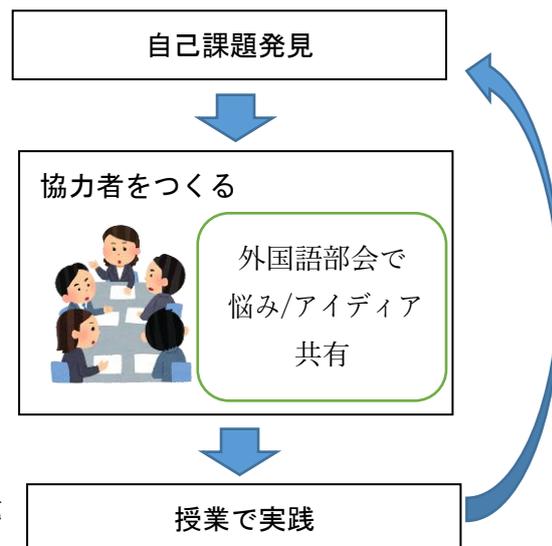
➤考察 これは外国語研究部会で、校内研修で全職員と共有したい内容を明確にした上で専門主事に研修会を依頼、実施したためであると考えられる。さらにF教諭は、研修内容をアウトプットすることで自己課題に気付き、校内研修会後、児童の実態やこれまでの実践等に基づいた授業改善を進めることができたという。

エ) 校内研修 2回

➤内容 2回目の校内研修ではF教諭、G教諭がセンター研修講座、1回目の校内研修での学びを土台に、児童の実態や他教科での実践、自分らしさを生かし、授業公開を行った。また、専門主事は、F教諭、G教諭の授業実践から全体で共有したいポイントや、さらに効果を高めるためのポイントを取り上げた事後指導を行うとともに、当該校からニーズがあったアクティビティの紹介を行った。

➤成果 授業公開後、F教諭、G教諭は「子どもたちの反応もよく、もっと授業をしたいという気持ちになった」「授業の流れを自分で考えたり、子どもが、授業の学びを自覚できるワークシートを工夫してやってみようと思えるようになった」と手ごたえを感じ、F教諭、G教諭による校内研修を通して学んだ同僚教諭の中には、

外国語の研修で学んだことを、学級経営にまで発展させて考えてくれた先生もいたという。



オ) まとめ

担任が進めていく外国語の授業に戸惑いを感じている職員も多かったα校に「研修転移」が起きたのは、①悩みやアイデアを相談・共有できる外国語部会の存在と②管理職の理解と後押しがあったためであると考えられる。

②外国語研究 2年目β校～職員がつくる研修会をサポート～

ア) 現状

β小学校は昨年度、外国語研究部会を立ち上げた。外国語主任の先生は、「子どもたちが力をつけられる外国語活動がしたい」「担任が行う外国語活動の授業に対しての先生方の不安を解消したい」と願い、センターの「教職員研修会サポート」事業を利用して、専門主事と校内研修会を計画し、実施した。昨年度の校内研修会は、当該校のニーズをもとに専門主事がリードをしながらの校内研修会であった。2年目となる今年度は外国語主任が、センター研修講座を受講したH教諭を中心にした校内研修会を実施しようと考え、学校長、教頭に相談をし協力を得た。



イ) センター研修講座と校内研修の企画

H教諭は、7月にセンター研修講座で専門主事による模擬授業を体験し、1時間の授業の流れをつかんだ。それから、8月に計画していた校内研修会に向け「今日の研修のように伝達を行いたい。実際に校内の先生方と模擬授業をしながら伝えていきたい。」と考え、帰校後、



外国語主任を中心とした外国語部会の教諭と共に校内研修会を企画・実施した。

ウ) 校内研修

➤内容 8月の校内研修会では、H教諭が、専門主事の作成したスライドを使って研修講座で体験した模擬授業を再現した。この研修会では、専門主事はサブとして、横からH教諭の発表を補助したり、内容についてさらに効果を高めるためのポイントを補足説明したりした。

H教諭は、9月の授業公開も、センター研修講座で扱ったものと同じ単元で行いたいと考え、模擬授業では、授業公開を想定し、指示の言葉を出したり、発問を行ったりした。そのことも踏まえ、専門主事は校内研修会後のフィードバックの際、H教諭に「児童同士のやり取りをさらに増やすために、研修講座で伝えた内容をそのまま伝達するのではなく、児童にとって身近なモノや話題を取り上げていくことがよいのではないか」と助言した。

➤成果 教職員研修会サポート後のアンケートによると、児童の立場になって授業を体験することで「英語を通して教師と児童がやり取りを行うスモール・トークの良さを実感した」、「見本とならなければいけないと自信がもてずにいたスモール・トークに対する見方が変わった」という内容があった。

➤考察 センター研修講座では授業を受けるという児童の立場であったH教諭は、校内研修会で模擬授業を行うことで、児童と教師の両方の立場を体験し、授業を行っていく上での具体的な課題に気付きを深めたようであった。同時に、模擬授業の形での校内研修を受けた同僚には、体験を通して実際の授業をイメージしてもらうことができた。

エ) その後の実践

その後、部会で検討を経て、9月の授業公開では社会科で学習している都道府県についての内容と英語の学習内容をつなげた授業を行うことができた。また、授業展開も専門主事が研修講座で行ったものをもとに児童の実態等に合わせてアレンジをした。

授業公開当日、H教諭は児童たちになじみのある話題やキャラクターを使い、児童の興味や関心を引き出しながら授業を行った。H教諭の楽しそうに英語を話す姿、児童に安心感をもたせるやり取りを通して、児童も次第に自信をもって英語で自分自身のことを表現できるようになる姿が見られた。

オ) まとめ

「研修転移」が起きた要因として事後のインタビューでH教諭が挙げたのは、①管理職や外国語部会主任の楽しみながら職員とともに学ぼうとする雰囲気と②専門主事による授業をアレンジする視点が与えられたことであった。

学んだ内容を実践する機会



校内
研修
会

子どもの実態等に合わせた アレンジ



授業
公開

3 成果と今後の展望

(1) 成果

➤ 研修転移の要因

- ・昨年度、そして今年度の研究から、「研修転移」が起きるには、以下の3つの要因が大切であることを検証することができた。

① 管理職の理解と後押し

② 職場で使える研修内容

③ 学んだ内容を実践する機会

- ・さらに、研修で学んだことが学校で実践され、持続的に生かされるためには、研修内容をそのまま活用するのではなく、受講者が「児童・生徒の実態」に合わせたり、「これまでの実践」等を生かしたりして研修内容をアレンジすることが有効であることが分かった。

④ 「子どもの実態等に合わせて研修内容をアレンジ」

➤ 教職員研修会サポートの在り方

- ・専門主事が、先生方が授業実践しやすいような視点を示すことで、研修講座で学んだ内容がさらに深まり、受講者が研修内容を自分のものとすることができる。
- ・専門主事は、サポート校で中心となって校内研修会を行う担当者と連絡を密にとり、当該校の実態を把握することで、当該校の実情とニーズに合った校内研修会のサポートを行うことができる。
- ・例えば、校内の研究がスタートしたばかりの学校では、「体験を重視」した研修会をともにつくり、一方、研究が深まりつつある学校ではミドルリーダーを前面に出して研修会をサポートすることで、学校独自の自立研修を促進することができるだろう。

(2) 今後の展望

- ・研修講座が校内研修につながった事例を研修講座の中で紹介したり、教育事務所の指導主事と情報共有をしたりすることで、先生方が校内研修をどのように計画・実施すればよいか見通しがつくれるようにする。
- ・校内研修を単発で終わらせることなく、専門主事が訪問をしなくても、継続的に校内研修を行うための支援のあり方について探る。